

万葉図書・情報室だより 36号

『万葉集』の昆虫・鳥



『万葉集』にはいろいろな種類の生き物が詠まれています。そのなかには現在も私たちの身近にいるもの、希少な存在となりつつあるもの、正体がかかっていないものなどさまざまです。たとえば、『万葉集』巻十の「夏の雑歌」にはつぎのような歌があります。

然しか然だもあらむ時ときも鳴なかなむ晚ゆふ蟬せみの
もの思おもふ時ときに鳴なきつつもとな

(一九六四番歌)

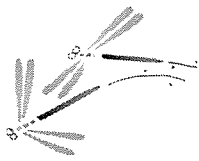
蟬を題材とした歌で、黙っていられる時に鳴いて欲しいのに、ヒグラシは物思いする時に鳴き続けるよ、という意味になります。『万葉集』にみられる蟬の歌は、いずれもその鳴き声を詠んだものです。私たちが蟬の鳴き声を聞いて季節の変化を感じるのと同じように、古代の人にとっても蟬の鳴き声は身近

な存在だったようです。

他にはどんな昆虫が『万葉集』に出てくるのでしょうか。左の表は『万葉集』に出てくる昆虫や鳥の表記で、現在と呼び方が異なっているものを集めてみました。

皆さんは全部わかりますか？

動物名	表記	万葉歌番号
あきづ	秋津	巻三・三七六
蜻	蜻	巻十三・三三二四
たづ	多津	巻一・七一
	多頭	巻三・三二四など
すがる	須軽	巻九・一七三八
	醉軽	巻十一・一九七九
たかべ	高部	巻三・二五八
		巻十一・二八〇四



以下、解答になります

あきづ

トンボやヤンマなどの総称で、カゲロウなども含まれるとする説があります。透き通った羽を女性の領巾や袖にたとえた歌がみられます。群れて飛ぶ様子は豊作のしるしとされており、現在の明日香村でも秋になるとたくさんトンボが飛翔します。

たづ

ツルの総称です。ツルは長い首やくちばしをもち、湿原に群棲する特徴があります。現在は昆虫や鳥の特徴ごとに細かく名称が付けられていますが、古代の人の呼び名は今よりもおろかなので、どうしても「総称」という説明が多くなります。

すがる

ハチのことで、なかでもジガバチのことを指すと考えられています。巻十六(三七九一番歌)に「海神の殿の蓋に 飛び翔るすがる(表記―為軽)の如き 腰細に 取り飾ほひ」(訳―海神の宮殿の屋根を飛びかける蜂のような細い腰に飾り)とあるように、美女の細い腰がジガバチの腹部のくびれにたとえられることもあります。

たかべ

コガモのことです。水辺で生息する様子や飛翔する姿が詠まれています。『万葉集』においてカモは、単に「かも」(表記―鴨・可母など)とされる場合が多いですが、なかには小さいカモを「をかも」、葦辺にいるカモを「あしかも」、水辺にいるカモを「みかも」とする表現もみられます。

(主任技師 小倉久美子)

○新着図書案内○

☆森浩一の考古交友録

(森浩一／朝日新聞出版)

☆小学生からの万葉集教室

(三羽邦美／瀬谷出版)

☆和泉市の考古・古代・中世(和泉市史編さん委員会編／ぎょうせい)

竹本晃主任研究員が「古代和泉の開発」を執筆しています。

利用案内

開館時間―午前十時～午後五時半

休館日―月曜日(祝日の場合は翌日)

日・年末年始・展示替日

図書室の「利用は無料です

閲覧でのご利用になります。

コピーサービス 白 黒一枚 10円

カラー一枚 50円

奈良県立万葉文化館万葉図書・情報室

奈良県高市郡明日香村飛鳥一〇

0744-5411850(代)